

早川徳次「早川徳次書簡」昭和9（1934）年7月10日

拝啓御手紙拝見

致し候処、大兄には微患

にて御引籠中との

こと、その後の御経過

如何に御坐候や御伺

申上候。我邦の財界

は大兄などの御指導

に俟まつもの多大に

これありそうろうあいだ

有之候間、御自愛

專一に祈上候。

御書翰中「小生に於ても

自分の如く喜に

たえず

不堪」と有之これあり、此句

に至り小生は思はず

暇のあつきを覚え

申候。今度の事業

は小生一代の事業と

して真に心血を注

ぎ候間、大兄の如く

幼少よりの学友より

斯の如き言葉に

接すると、万感

交々こいせいせい到て言い知

れぬ思に胸満され

申候。開通後の成績は

比較的良好に御

坐候間、先づく基礎

丈は確立致し候。

先は御見舞かたがた 旁

御礼 申述度もうしのべたくかくのごとくにそうろう 如此候。敬具。

七月十日 早川徳次

石橋老兄 侍史